学年　第１学年、第２学年

時間　２５分（表現活動の導入として）

題材　浮き彫りの表現
（三代金城一国斎、高盛絵）

HD－２９	菊雲鶴高盛絵食籠	１８８６（明治１９）年制作
HD－３４	牡丹高盛絵丸盆	１８９６（明治２９）年制作
HD－３５	白蓮花に蝶高盛絵角盆	１９０５（明治３８）年制作
HD－３６	虫に蔓草高盛絵会席盆	１９０８（明治４１）年制作
HD－３７	獅子に牡丹高盛絵菓子器	１９１２（明治４５）年制作
HD－３８	葦によしきり高盛絵香筒	１９０５（明治３８）年制作
HD－３９	へちま高盛絵煙管入　付煙草入	
HD－４０	ホタル高盛絵線香入	
HD－４６	草花図高盛絵皿四方膳	１９１４（大正３）年制作
HD－５３	獅子牡丹高盛絵台付き菓子器	１８８６（明治１９）年制作

題材について

中学校で浮き彫り表現の作品制作に取り組んでいる所は多いと思う。中には粘土や石膏を使っているところもあるかと思うがその多くは木彫の工芸制作ではないかと思う。いずれにしても限られた厚さの中に立体感を表現するところが技術的な指導の中心になっているであろう。

広島県立美術館は広島を代表する工芸である「高盛絵」、その技法を完成させた三代金城一国斎の作品を多く収蔵している。「高盛絵」は生漆ととの粉を練り合わせた、高盛漆とよばれるものを盛り上げて作られた工芸品である。図柄は動植物をモチーフにしたものが多く、デザイン化されたり、写実的に表現されたりしている。

技法は違っても、例えば木彫の小箱などを制作するときの参考作品としてふさわしいと思う。また作品の芸術的な美しさを鑑賞することや、伝統工芸について知ることも中学生にとって大切なことであると考える。

指導要領との関連

［第１学年］２内容　A表現（２）ア、イ　　B鑑賞　ア、イ
「第２学年及び第３学年」２内容　A表現（２）ア、イ　　B鑑賞　ア、イ、エ、オ

目標

・工芸作品の美しさを味わい、長い伝統の中で培われてきた美意識や技術について知る。
・浮き彫りの表現の仕方を学び、自らの制作に生かせるようにする。

学習展開

学習活動（予想される生徒の反応）	学習内容	指導上の留意点
作品の写真図版を見る。 感想を発表。 ・きれい ・立体感がある	作品の美しさをじっくりと味合わせる。	作品を鑑賞し、感想を持つ事ができたか。
「使うもの」になぜこのような装飾をしたのか、考えて発表する。 ・模様などがなかったらさみしい。使っていても味気ない。 ・使うだけでなく見て楽しむことができる。	これから制作していくことの意義を理解させる。	身の回りの物に装飾が施されている理由を考え、理解することができたか。
作品の絵柄がどのように表されている考えて発表する	浮き彫りの概念を理解させる。	

るか考えて発表する。 ・飛びだしている ・半立体 立体の絵柄の部分図をみて断面図を想像して描いてみる。 浮き彫りの立体感を表現するための工夫についての説明を聞く。 高盛絵と伝統工芸についての説明を聞く。 感想を書く。	限られた厚みの中に立体感を表現する工夫を理解させる。 三代一国斎が初代から受け継がれてきた技法を工夫して高盛絵を完成させたことや、現在（七代）に至るまでその伝統が守られさらに工夫を重ねて新しい作品が生み出されていることを説明する。	浮き彫りの表現に気づき、理解することができたか。 浮き彫りの断面を想像し図に表すことができたか。 説明をしっかり聞いていたか。

準備物
・作品写真図版
・ワークシート
・感想文用紙

参考文献・資料
金城一国斎展図録　中国新聞社　２００４年
広島県立美術館ワークシート「虫に蔓草高盛絵会席盆」
「漆の技法」

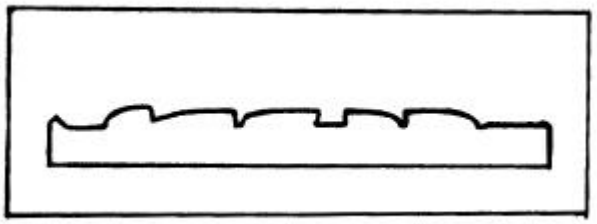
鑑賞ワークシート

浮き彫り の表現

「金城一国斎」の作品図版を見て、考えてみましょう。
“使うもの”になぜこのような装飾をしたのでしょうか？
　生活する場を美しく飾りたい。
　模様がなかったらさみしい。
これらの作品の絵柄はどのように表されていますか？
　でこぼこしている。
　立体的にできている。
　浮き上がっている。
（　レリーフ　）・・・形象や模様が浮き上がるように、平らな面を彫り込み、あるいはその上に盛り上げて制作する技法。またその作品。浮彫。（広辞苑より）

物を切ったときの切り口の形を描いた図を（　断面図　）といいます。
次の図の断面図を想像して描いてみましょう。

点Aと点Bを線で結び、その線にそって切った時の断面図を下の枠の中に描く。



金城一国斎
初代・・・安永六年（１７７７）～嘉永四年（１８５１）
　　大阪で漆芸を修行。蒔絵を得意としたほか、甲冑や刀の鞘塗の名工でもあった。
二代・・・鎌倉、長崎で漆芸を研究。高盛絵を考案する。
三代・・・文政十二年（１８２９）～大正四年（１９１５）
　　眼病治療のため広島を訪れていた二代から漆芸を学び、師とともに各地を巡って漆芸を研究。
　　高盛絵の技法を完成させる。
　　展覧会に出品し、受賞を重ね、全国にその名を知られるようになる。
四代・・・明治九年（１８７６）～昭和三十六年（１９６１）
　　広島県無形文化財 一国斎高盛絵・金蒔絵技術保持者に認定される。
五代・・・明治三十九年（１９０６）～平成三年（１９９１）
六代・・・昭和十二年（１９３７）～平成三年（１９９１）
七代・・・昭和四十年（１９６５）～
　　日本工芸会正会員、漆工史学会会員、日本工芸会中国支部幹事

平成　　年　　月　　日（　　）曜日

第　　学年　　組　　番　氏名